

The evaluation of rectal mucosal punch biopsy in the diagnosis of Hirschsprung's disease: a 30-year experience of 954 patients

吉丸, 耕一郎

<https://hdl.handle.net/2324/2348710>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	吉丸 耕一郎
論文名	The evaluation of rectal mucosal punch biopsy in the diagnosis of Hirschsprung's disease: a 30-year experience of 954 patients
論文調査委員	主査 九州大学 教授 大賀 正一 副査 九州大学 教授 小田 義直 副査 九州大学 教授 澤 新一郎

論文審査の結果の要旨

小児期に発症する便秘症で代表的な疾患に、腸管壁内の神経節細胞が欠如し腸管蠕動不全を呈するヒルシュスプルング病がある。本症の神経節細胞欠如領域は肛門側から連続するため直腸組織を用いた病理学的診断が可能である。組織採取手技としては直腸粘膜生検が広く行われ、世界的に吸引生検が主流である。一方、申請者らは30年間、継続的にパンチ生検を施行してきた。本研究にて手技の安全性を評価した。1986年4月から2016年3月までに、当科と関連施設にて、本病が疑われS-moid 鉗子と非特異的採血管を使用した本来の「K-PUNCH」法を含め、パンチ生検を受けた患者を対象とした。このパンチ生検技術は、優れた視認性と直接的な把持感を特徴とする。患者の背景と合併症を後方視的に検討した。対象期間中、954人の患者(年齢中央値、4ヵ月;範囲日齢1日~73歳)がパンチ生検を受けた。重篤な合併症(直腸穿孔、感染または全層生検)はなかったが、対象期間初期の1例(0.1%)は、生検後輸血を要する出血を認めた。37人(3.9%)は検体搬送の問題から不適切な検体採取となっていた。「K-PUNCH」法を含むパンチ生検は全年齢層の患者に安全に実行可能と考えられ、合併症や不適切検体の割合が低い。出血を含む合併症は、常に考慮する必要がある。

以上の成績は、希少疾患の多数例の解析から本領域の研究の発展と治療へ向けて重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず本症とその類縁疾患の背景、研究目的、方法、結果と解釈などについて説明を求めた。各調査委員より、病理学および臨床遺伝学的観点から、論文内容とこれに関連した事項について、種々の質問を行い、適切な回答を得た。なお、予備調査の結果、本論文の著者12名のなかで、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。